

## 教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の 教育効果に関する研究

### A Study of the educational effects of voluntary tasks at school by university students who are teacher candidates

溝部ちづ子・石井 眞治・古谷嘉一郎・斉藤 正信・財津 伸子・山崎 茜  
Chizuko MIZOBE, Shinji ISHII, Kaichiro FURUTANI,  
Masanobu SAITO, Nobuko ZAITSU and Akane YAMASAKI

Joining voluntary tasks at school has been recommended to the teacher candidates of Hijiya University. Three years ago, students in the Department of Child Development and Education took part in the project pursued by Hiroshima City. Now that the participants those who first experienced it are about to graduate the university, a survey was conducted to find out their responses, which should reveal some effects on their mindsets and help improve the teacher training system. The purpose of this study is to find out what they learned from their experiences as voluntary workers at school, what embarrassed them or gave them joy during their work, how it changed their motivations to become a teacher, and how they came to review the university lessons in general or student teacher training. The main findings are as follows: (1) Joining voluntary tasks at school had considerable positive effects on their motivations to become a teacher, (2) it had good effects on their attitudes toward regular lessons at the university, (3) it helped them recognize problems of student teacher training, and (4) it helped them realize what is needed to be a competent teacher.

#### 問 題

本研究の目的は大学生による学校支援ボランティア活動が教職をめざす学生にとってどのような影響や教育効果があったかを明らかにし、大学教職課程の改善のための基礎資料とし、学校支援ボランティア活動の指導モデルを構築するところにある。

近年の学校教育における最重要課題は、教育の直接の担い手である優秀な教員の確保、とりわけ実践的指導力を有する教員の確保である。そのため、各教育委員会は新たに教員を採用する際には、教育論や知識を問う筆記試験重視の採用試験の形態から指導案の作成やそれに基づく集団討論、模擬授業等を通して教師としてのリーダーシップや実践的指導力を評価する採用試験の形態に移行しつつある。また、実践的指導力を有する優れた教師を確保するため、こうした採用試験の改善に加え、本年度からは、教員養成系大学・学部で教員免許状を習得するために「教育実践演習」の必修化が義務づけられ、教員養成段階での実践的指導力の養成が求められるようになった。さらには、現職教員を対象とした特別選考制度や大学院修学者等に対する特別措置制度を導入し、実践的指導力を有する優れた教師を採用しようとしている。また、現職教員の実践的指導力の強化をはかるために、現職教員の

研修会においても、教育委員会の研修所における講義主体の研修から、それぞれの学校におけるワークショップ、ケース研究、授業研究中心の現職教員の実践的指導力の向上を目指した研修が盛んに行われるようになってきた。さらには、各地の教育委員会が開校する「教師塾」の動き、2008年度から各教育委員会と強い連携が求められる「教職大学院」の開設は、現在、教員養成を担っている大学における教員養成のあり方に対する疑念の表れと指摘している(長谷川, 2011)。

こうした大学における教員養成のあり方に対する疑念は古くから認識され継続的に改革がなされてきた。中央教育審議会答申(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では大学の教員養成カリキュラムが今日の学校現場の抱える複雑化・多様化する課題に必ずしも十分対応していないとし、大学における教員養成カリキュラムの改善を求めている。

こうした教員養成系大学・学部における教員養成カリキュラムの改善に対する社会からの要請に応えるべく、多くの教員養成系大学・学部が導入したプログラムの一つが学校支援ボランティア活動の経験である。この活動の導入目的は、教職志望の学生が教育実習に加え、教師、児童・生徒と直接ふれ合い実践経験を積む機会を増やし、これが教職志望学生の実践的指導力の育成・強化に連なるとの認識にあるとされている(姫野, 2006)。もともと、教職志望学生を学校支援ボランティアとして教育機関に派遣する学校支援ボランティア活動の制度は1998年に文部省(当時)が教員養成学部フレンドシップ事業を政策化したことに始まるとされている(姫野, 2006)。

その後、多くの教員養成系大学・学部でこの制度が導入・持続されてきたのは、教職志望学生の実践的指導力を育成するためである。大学での理論的知識だけの養成では不十分であり、できるだけ教職志望学生が、児童・生徒と直接ふれ合う機会が必要であるとの大学の認識からである。一方複雑な社会状況を反映し、学校では教師が「いじめ・不登校・暴力行為・学力低下・学習意欲の低下」などに対応するため日々奔走しており、児童生徒との細やかなふれ合いを行うにも人的資源・時間的制限に直面していることから、大学と教育現場両者の課題を解決できる方策として注目されたためであろう。

教員養成系大学・学部での学校支援ボランティア活動の導入の増加に伴い、学校支援ボランティア活動に関する研究の蓄積が行われてきた。教員養成に及ぼす学校支援ボランティア活動の影響に関する研究を概観すると ①授業場面での学校支援ボランティアの役割に関する事例研究 ②教員養成学部学生による学校支援ボランティア活動のもつ意義に関する研究 ③学校支援ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果に関する研究 ④学校支援ボランティアの概念に関する研究 ⑤教師の「実践的指導力」に関する研究 ⑥「実践的指導力」を備えた教員の養成に関する研究に分類できる。

学校支援ボランティア活動は、教職を目指す学生の「活動」の一つである。従って、教職志望学生がこの直接的・具体的活動を経験することにより学生自身のみならず、受け入れ先の学校、児童・生徒、教師、保護者、地域にも何らかの影響を与えている。

教職志望学生の学校支援ボランティア活動は、サービラーニングのもたらす互酬性からボランティア先にも、また学生自身にも何らかの影響を与えたことが明らかになっている(宗澤, 2003; 森下・麻生・藤田・久間・衛藤・竹中・大岩, 2010)。

学校支援ボランティア活動が学生たちに及ぼす影響として、さまざまな実践的指導力が形成される(松浦, 2002; 姫野, 2006; まなびんぐ紀要2009)ことや、実践的指導力の重要性の認識が強くなる(藤田・麻生・衛藤・松本・竹中・大岩, 2009)ことが明らかになっている。さらには、学校支援ボランティア活動経験は教育実習で得られる効果とは異なった効果や意義があること(黒崎, 2002; 黒崎, 2006)も明らかになっている。

本学では、子ども発達教育学科の新設(4年目)によって、小学校教員養成を目指している。H市教育委員会と提携を結び、市内公立小・中学校での学校支援ボランティア活動に3年前から参入している。

本研究では、小学校教員を志望する本学の教職志望の学生が、学校支援ボランティア活動を行うこ

とによって、その体験から何を学んでいるか、何に困難を感じたのか、何に喜びを感じたか、そのことから教職への意識がどのように変容したか、大学の授業に対する考え方はどのように変容したか、教育実習への意識がどのように変容したかなど、学校支援ボランティア活動に参加する本学の学生に対する意識調査から、「教育効果」を研究考察することとした。こうした目的を達成することは、今後、教員養成大学のカリキュラム改善にもつながるであろう。そして、若い教師たちの経験不足不安や実践的指導力不足(石原2011)を軽減することにもつながるであろう。

## 方 法

### 調査対象者

調査対象者は本学学生1年生から4年生までの男性30名、女性27名、計57名であった。

### 調査票

質問票は「大学生による『学校支援ボランティア活動』の教育効果に関する実証的研究調査」という題で「大学生による『学校支援ボランティア活動』が教職をめざす学生にとってどのような影響や教育効果があったかについて明らかにし、より良い大学教職課程改善のための基礎資料とし、学校支援ボランティアの指導モデルを構築するものです」との教示文を付して次の質問項目から構成した。

### 質問紙の構成

1. 個人属性：性(男/女)
2. 学校支援ボランティア活動に参加した学年
  - ①大学1年②大学2年③大学3年④大学4年の選択肢に対し参加した学年を複数回答で求めた。
- 3-1. 全学校支援ボランティア活動参加日数
  - ①10日未満②10日-15日程度③16日-20日程度④21日-25日程度⑤26日-30日程度⑥31日-35日程度⑦36日以上7の選択肢で択一回答させた。
- 3-2. 全学校支援ボランティア活動参加時間
  - ①20時間-30時間②31時間-40時間③41時間-50時間④51時間-60時間⑤61時間-70時間⑥71時間以上の6の選択肢で択一回答させた。
4. 学校支援ボランティア活動の参加校種：①小学校②中学校の2の選択肢で択一回答させた。
5. 教育実習を終了したか否：①修了した②未だの2の選択肢で択一回答させた。
6. 参加学校支援ボランティアの活動
 

参加調査者が、活動中にどのような活動を経験したかを明らかにするため17の活動を示し、経験した活動のすべてに○をつけさせた。また、提示した17の活動項目は、広島市教育委員会と広島市内外の大学が協定を結んでいる事業「学生による学校支援活動」と、大分大学福祉科学部まなびんぐサポート運営委員会(2009)を参考にした。設定された活動は①授業時の個別支援や配慮児童生徒への個別支援②体育や図工などの担任教師の授業補助③プリント学習などの指導補助④プリントや宿題などの○つけ補助⑤学校行事の補助⑥ゲストティーチャーとしての指導(総合的な学習など)⑦特別支援学級での指導補助⑧校外学習の指導補助⑨休み時間の遊び支援⑩清掃活動支援⑪給食活動支援⑫図書室支援⑬花壇の整備⑭教材教具の準備⑮印刷物の支援⑯あいさつ運動の支援⑰担任不在時に学級を任されるの17活動であった。
- 7-1. 学校支援ボランティア活動経験の教職志望への影響
  - ⑤非常に強くなった④やや強くなった③変わらない②やや弱くなった①非常に弱くなったの5段階尺度で回答させた。
- 7-2. 学校支援ボランティア活動経験の教職志望への影響理由

7-1の教職志望の変化についてその理由を自由記述法で回答させた。

8. 学校支援ボランティア活動参加中の困難認知

学校支援ボランティア活動参加中に経験した困難な事柄について次の18項目についてそれぞれ⑤全く困らない④あまり困らない③どちらでもない②少し困った①非常に困ったの5段階尺度で回答させた。大学生が学校支援ボランティア活動中に経験する困難な活動は、広島市小学校校長経験者3名によるKJ法の結果選択された活動であり、①どのように指導をするかなど指導の方法 ②児童生徒への声かけの仕方 ③児童生徒から問われたときの回答(学習時) ④児童生徒との話の仕方 ⑤児童生徒との接し方 ⑥児童生徒への個別の指導や対応 ⑦児童生徒の集団への指導や対応 ⑧叱り方 ⑨ほめ方 ⑩児童生徒への言葉づかい ⑪先生方への言葉づかい ⑫教頭・校長とのコミュニケーション ⑬他の先生方とのコミュニケーション ⑭学校支援ボランティア活動経験校での記録の取り方 ⑮学校支援ボランティア活動経験校での報告の仕方 ⑯学校支援ボランティア活動経験校での挨拶の仕方 ⑰文や文字を書くこと(丁寧さ・正確さ) ⑱大学での授業との時間の調整であった。また、項目⑲として尺度以外で経験した困難な経験を自由記述法で回答させた。

9. 学校支援ボランティア活動参加中のポジティブ経験

「児童生徒や先生方とかかわるなかで喜びを感じたこと、楽しかったことはどんなことですか」との質問文で自由記述法で回答させた。

10. 学校支援ボランティア活動参加による教員資質に対する認識

学校支援ボランティア活動に参加したことで、学んだと自己評価した資質・能力を16項目で示し、⑤とても学んだ④それなりに学んだ③どちらでもない②あまり学べなかった①全く学べなかったの5段階尺度で回答させた。また、項目⑰として上記以外に学んだと思う資質・能力を自由記述法で回答させた。学校支援ボランティア活動参加中に学んだと自己評価する資質・能力は ①他の教員や保護者、地域の方とコミュニケーションをとる ②児童生徒の予想外の反応を受け止め、臨機応変に支援の仕方を考える ③支援の仕方について自分なりの考えが持てる ④教師として適切な言葉遣いができる ⑤児童生徒に対し、教科の指導の仕方がわかる ⑥児童生徒の発言や行動の気持ちを理解する ⑦児童生徒に対し、望ましい学習態度を指導する ⑧すべての児童生徒に公平に接する ⑨児童生徒の発言や行動を共感的に受け止める ⑩教育者としての素直さ、謙虚さ、協調性を持つ ⑪自分なりの教育観を持つ ⑫自分なりの育てたい児童観・生徒観を持つ ⑬教育実習に役立つ能力が育まれる ⑭子どもの実際の姿を理解する ⑮教師の仕事内容を理解する ⑯学校現場の実際を理解するであった。この16項目は、教員養成審議会答申(1997)の「これからの教員に求められる資質能力」を参考にし、8の質問同様広島市小学校校長経験者3名が実際の学校支援ボランティア登用経験に基づきKJ法による予備調査から設定した。

11. 学校支援ボランティア活動経験が大学の正規授業の意義に及ぼす影響

「学校支援ボランティア活動を経験し、大学で学んでおけばよかったこと(学びたいと考える授業)は何ですか」との問いで5順位尺度で回答させた。

12. 学校支援ボランティア活動経験が大学の正規授業受講態度に及ぼす影響

調査対象者が学校支援ボランティア活動後、大学授業の受け方がどのように変化したかを、①授業内容の具体的イメージが持てるようになった ②授業に興味を持てるようになった ③課題意識をもって臨むようになった ④授業内容を理解するようになったの4尺度で示し、それぞれ4件法(4とてもできるようになった 3それなりにできるようになった 2あまりできなかった 1全くできなかった)の4段階尺度で回答させた。4尺度については、広島市「大学生による学校支援活動」体験エッセイ集(2009, 2010)に基づき、大学教員2名が設定した。

### 13. 学校支援ボランティア活動経験の教育実習へ及ぼす有用性

「学校支援ボランティア活動経験が教育実習を行う上でどのように役に立ったと思うか」との問いで自由記述により回答させた。

## 結 果

### I 分析対象者の属性

調査参加者：主たる分析対象者は男性30名(53%)、女性27名(47%)であった。

学校支援ボランティア活動に参加した学年：学校支援ボランティア活動に参加した学年は大学1年13名(24%)、大学2年46名(82%)、大学3年生7名(13%)であり大学1年生、2年生に集中していた。

全学校支援ボランティア活動参加時間：71時間以上15名(27%)、61時間－70時間14名(25%)、41時間－60時間11名(20%)、31時間－40時間12名(22%)、であり、ほとんどの学生が31時間から71時間以上活動を体験していた。

全学校支援ボランティア活動参加日数：10日－15日14名(25%)、16日－20日7名(12%)、21日－25日9名(16%)、26日－30日12名(21%)、31日以上14名(25%)であった。99%の学生が、10日以上、学校支援ボランティア活動を体験していた。

参加した校種：小学校への参加が55名(97%)、中学校への参加が2名(3%)であった。

教育実習経験：17名(30%)が教育実習経験者、40名(70%)が教育実習未経験者であった。

### II 参加学校支援ボランティアの活動

17の学校支援活動に対する調査対象者の参加活動の実態を整理した。この結果、参加活動の様子をみると、①授業時の個別支援や配慮児童生徒への個別支援(95%) ⑨休み時間の遊び支援(93%) ③プリント学習などの指導補助(86%) ④プリントや宿題などの〇つけ補助(80%) ②体育や図工などの担任教師の授業補助(67%)であり、半数以上の学校支援ボランティア活動参加大学生が直接、子どもとの学習や個別支援を体験していた。続いて⑮印刷物の支援(49%) ⑩清掃活動支援(46%) ⑭教材教具の準備(37%) ⑤学校行事の補助(32%)と3割以上の学校支援ボランティア活動参加大学生が児童・生徒とふれ合いを体験していた。また、⑦特別支援学級での指導補助(28%) ⑪給食活動支援(25%) ⑫図書室支援(23%) ⑬花壇の整備(21%)等の体験をしていた。

### III 教職志望への影響

「学校支援ボランティア活動に参加したことで教員をめざす気持ちがどのように変化しましたか」との問いで学校支援ボランティア活動参加が教職志望に及ぼす影響を検討した。非常に強くなった(28%)や強くなった(54%)と8割強の学生が学校支援ボランティア活動を体験したことにより教員志望動機が促進したと評価していた。一方、1.8%の学生が学校支援ボランティア活動の体験により教員志望動機を減少させていた。「強くなった」理由は、以下の通りである。魅力的な仕事・学級経営の素晴らしさ・授業の素晴らしさ・先生がかっこいい等、「教師の仕事ぶり」に着目しているものや、何より楽しい・使命感・やりがい・目的意識が芽生えた等、「学生自身の意識や感性に変化が生じたもの」、また、子どもとのかかわりが楽しい・かわいい・子どもが好き等、「子どもとのかかわりの中で喜び」を感じたもの、そして、実感を伴った理解・児童の実態が見えた・具体的に見えた・授業の仕方や様子がわかった等、「具体的な教師像」に言及するものが多い。一方、「弱くなった」や「変わらない」の理由は、教育現場を目の当たりにして不安・自信がなくなった・児童への対応は難しいと感じた・大変さがわかった等、夢と現実のギャップを感じ、「自分の能力に対する振り返り」を行っているものがある。

## IV-1 学校支援ボランティア活動参加中の困難認知（因子分析）

調査参加者の17項目への回答評価に基づき因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果，3因子構造が妥当であると判断した。因子分析表を表1に示す。また表1には17尺度毎の平均値と標準偏差を示した。

表1 学校支援ボランティア中に経験した困難についての因子分析負荷量・平均値・標準偏差値

	因子負荷量			平均値	標準偏差
	第1因子 先生方との コミュニケーション	第2因子 児童生徒への声かけ (応答)	第3因子 児童生徒への 指導や対応		
13 他の先生方とのコミュニケーション	0.87			3.35	1.07
12 教頭・校長とのコミュニケーション	0.84			3.54	1.09
15 ボランティア校での報告の仕方	0.64			3.35	0.87
14 ボランティア校での記録の仕方	0.51			3.05	1.13
16 ボランティア校での挨拶の仕方	0.47			3.72	0.85
11 先生方への言葉遣い	0.38			3.91	1.03
4 児童生徒との話の仕方		1.01		3.12	1.20
5 児童生徒との接し方		0.68		3.12	1.14
10 児童生徒への言葉遣い		0.53		2.95	1.15
2 児童生徒への声かけの仕方		0.49		2.56	1.15
3 児童生徒から問われた時の回答（学習時）		0.43		2.51	0.92
6 児童生徒への個別の指導や対応			0.62	2.51	0.94
7 児童生徒の集団への指導や対応			0.56	2.28	1.00
9 ほめ方			0.48	3.23	1.08
1 どのように指導をするかなど指導の方法			0.41	1.79	0.87
因子寄与	4.02	3.16	2.34		
信頼性 ( $\alpha$ )	0.80	0.77	0.34		

この表1から，第1因子は他の先生方とのコミュニケーション，教頭・校長とのコミュニケーション，学校支援ボランティア活動経験校での報告の仕方，学校支援ボランティア活動経験校での記録の仕方，学校支援ボランティア活動経験校での挨拶の仕方，先生への言葉遣いの項目に負荷量が高く，先生方とのコミュニケーション因子とした。第2因子は児童生徒との話の仕方，児童生徒との接し方，児童生徒への言葉遣い，児童生徒への声かけの仕方，児童生徒から問われた時の回答に負荷量が高く，児童生徒への声かけ因子とした。第3因子は児童への個別の指導や対応，児童の集団への指導や対応，ほめ方，指導方法項目に負荷量が高く，児童生徒への指導や対応因子とした。

この表1に基づき，各調査対象者の因子得点を算出し，一要因の分散分析を行った結果，困難性因子に統計的に優位な主効果が認められた ( $F=38.67$ ,  $df=2/112$ ,  $P<01$ )。そこで，Ryan法により単純効果の検定を行ったところ，学校支援ボランティア活動経験者は児童生徒への指導や対応 ( $\bar{X}=2.44$ ) に対してが，児童生徒への声かけ ( $\bar{X}=2.85$ ) よりもより困難を経験したことが判明した ( $t=3.42$ ,  $P<01$ )。また，児童生徒への声かけ ( $\bar{X}=2.85$ ) に対しては先生方とのコミュニケーション ( $\bar{X}=3.48$ ) に対してよりもより困難を経験したことが判明した ( $t=3.42$ ,  $P<01$ )。

## IV-2 学校支援ボランティア活動参加中の困難認知（自由記述）

自由記述については，「児童の様子とその対応」についてが多く，授業に集中しない児童がいる・障害のある児童の突然の動きに困った・学級が荒れている・配慮児童への対応でどの程度かわかることが学校から求められているかわからない等があった。また，さまざまな学級へ入ることから，「児童の名前と顔の不一致」や「学級での学習ルールの違いで戸惑った」ことや，「休日などで自分の地域の過ごし方」等，学校支援ボランティア活動者としての自覚が生まれたことでの困難認知もあった。

## V 学校支援ボランティア活動参加中のポジティブ経験（自由記述）

学校支援ボランティア活動で喜びを感じたこと、楽しかったことを明らかにするため自由記述で回答させた。155件の記述内容があり、3人の研究者がKJ法により、6つのカテゴリーに分類した。

カテゴリー①「子どもからの信頼」は、63件(41%)の回答である。先生と呼ばれることがうれしい・一緒に遊ぼうと言ってくれた・子どもに覚えてもらったとき・子どもが自分のことをいろいろ語ってくれたこと・声をかけてくれる・児童の疑問に的確に答えることができた・笑顔でみんなが挨拶してくれる・徐々に心を開いてくれた・問題ができたなら真っ先に見せに来てくれる・頼ってくれる・先生好きと言ってくれる・覚えてたの漢字で私の名前を書いてくれた・自分の行為に対して先生すごいと言ってくれる・先生が来るのが楽しみと言ってくれる等である。

カテゴリー②「先生からの信頼」は19件(12%)であった。出席を取ってくださると任された・朝の会などを任された・先生と一緒に授業ができたこと・先生に態度をほめられたこと・先生方が親切にしてくださったこと・休んだ後に先生方が心配して声をかけてくださったこと・児童を少しの時間だけが任されたこと・先生方が相談に乗ってくださったこと・先生方が丁寧に接してくださったこと・先生方から大学時代の話やアドバイスをいただいたこと・毎回先生方に勉強方法を教えていただけると・教育実習の学生と同様に扱っていただいた・先生の仕事を手伝わせていただいた等である。

カテゴリー③「学生の指導の効果」は33件(21%)である。体育の授業で縄跳びを教えたなら少し飛べるようになったと児童が日記に書いていた・解けなかった問題ができたこと・勉強を教えたならわかったと言ってくれたとき・一緒に考えて、周りの子と同様すらすらできるようになったとき・教えたことを理解してくれたとき・一生懸命教えたなら真剣に取り組んでくれたこと・集中して勉強に取り組んでくれたこと・励ましに応じて、特別支援学級の児童が教室に入ることができたとき等である。

カテゴリー④「現場の教師や子どもの姿に触れたこと」は、14件(9%)である。休み時間にたくさんの子とも遊ぶことができて楽しかった・自分の生活では子どもと触れることがないのでかわること自体が楽しい・普段の大学生活では感じることでできないかわりの楽しさを感じる等である。

カテゴリー⑤「感謝されたこと」は13件(8%)である。教頭先生から「素晴らしい」とほめていただいた・子どもに勉強を教えるのがうまいと言ってもらったとき・先生に態度をほめられたとき・保護者の方にバレーの練習や試合に誘われたとき・児童からありがとうと言われたとき・先生方にお礼を言われたとき・学習の補助をしたときに感謝された・みんなに楽しかったありがとうと言われた・先生方にいつもありがとうと言っていたと等である。

カテゴリー⑥「やりがい・感動・目標が見えた」は、13件(8%)である。かわったこともない児童から声をかけられる・子どもたちの成長を見られると感動する・発達障害の児童にかかわらせていただき、その児童の成長や周りの子の成長など子どもの力に感動した・一緒に時間を過ごし自分のめざすものが少しははっきりした・一緒に行事の運営を行ったとき・先生にすごく面倒な仕事を任されたとき役に立っていると感じた・児童が真剣に何かを成功させようとしているときに感動する・先生方に感謝されると力不足で申し訳ないと思いつつもっと頑張ろうと思う等である。

## VI 学校支援ボランティア活動で得た教員としての資質・能力

調査参加者の17項目への回答評価に基づき因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った結果, 3因子構造が妥当であると判断した。因子分析表を表2に示す。また表2には17尺度毎の平均値と標準偏差を示した。

この表2から, 第1因子は児童観・生徒観をもつこと, 自分なりの教育観をもつこと, 支援の仕方について自分なりの考えをもつこと, 児童生徒に臨機応変に対応すること等の項目に負荷量が高く, 「教師としての教育観」と命名した。第2因子は指導内容を理解すること, 学校現場の実際を理解するこ

表2 学校支援ボランティア活動で得た教員としての資質・能力についての因子分析、負荷量・平均値・標準偏差

	因子負荷量			平均値	標準偏差
	第1因子 教師としての教育観	第2因子 教育実践への理解	第3因子 教師としての人柄		
自分なりの育てたい児童観・生徒観を持つ	0.93			3.89	1.05
自分なりの教育観を持つ	0.82			3.86	0.96
支援の仕方について自分なりの考えがもてる	0.62			4.02	0.71
児童生徒に臨機応変に対応	0.56			3.91	0.98
教師の指導内容を理解する		0.85		4.19	0.74
学校現場の実際を理解する		0.61		4.32	0.73
教育実習に役立つ能力が育まれる		0.56		4.28	0.74
子どもの実際の姿を理解する		0.43		4.56	0.65
教員同士・保護者・地域とのコミュニケーション		0.38		3.93	0.77
児童生徒への教科の指導の仕方がわかる		0.38		3.65	0.91
教育者としての素直さ、謙虚さ、協調性			0.78	3.93	0.70
すべての児童生徒に公平に接する			0.70	3.88	0.90
児童生徒の発言や行動を共感的に受け止める			0.54	4.07	0.62
因子寄与	2.93	3.21	2.02		
信頼性 ( $\alpha$ )	0.80	0.78	0.58		

と、教育実習に役立つ能力が育まれる、子どもの実際を理解する、教員同士・保護者・地域とのコミュニケーション、児童生徒への教科の指導方法が分かる等の項目で負荷量が高く、「教育実践への理解」とした。第3因子は教育者としての素直さ、謙虚さ、協調性、全ての児童生徒に公平に接する、児童生徒の発言や行動を共感的に受け止める等の項目で負荷量が高く、「教師としての人柄」因子とした。

この表2に基づき、各調査対象者の因子得点を算出し、一要因の分散分析を行った結果、教員に必要な資質能力因子に統計的に優位な主効果が認められた ( $F=3.15$ ,  $df=2/112$ ,  $P<05$ )。そこでRyan法により単純効果の検定を行ったところ、学校支援ボランティア活動経験者は「教育実践への理解」( $\bar{X}=4.16$ )が、「教師としての人柄」( $\bar{X}=3.96$ )や「教師としての教育観」( $\bar{X}=3.92$ )よりもより必要な資質や能力であるとの認識を形成したことが判明した。

自由記述については、28件の記述があった。その結果を表3に示した。

「教師としての指導技術」に関するものが65%あり、教室掲示の効果的なあり方・チョークの色の使い方・授業中の教師の立ち位置や目線・児童の叱り方等の具体的なものから、生徒指導や教育相談

表3 学校支援ボランティア先の学校で学んだこと (自由記述)

内容	回答数	(小計)	(%)
教師としての指導技術			
生徒指導・教育相談に関する知識、技術	9		
授業技術	6		
特別支援児への対応の仕方	3	18	65%
学校現場の日常			
実際の学校現場	2		
教員同士の雰囲気の違い	1		
職員朝会の内容	1	4	14%
印刷技術など			
印刷を効果的にする技術	2	2	7%
学校の防犯 (安全確保)			
学校の防犯	2	2	7%
教職への意欲			
教員への志望動機の再確認	1		
大学での授業以外の学びの必要性	1	2	7%
合計	28	28	100%

に関する知識と技術・授業技術・個への指導方法・児童理解・特別支援学級児童生徒への対応の仕方・学級経営まで幅広く技術的なものをとらえている。「学校現場の日常」に関するものは14%で、実際の学校現場・教員同士の関係性(雰囲気)・教師間の情報交流・職員朝会・モンスターペアレントの実態と対応・本気で毎日教師を続ける厳しさなどである。また、「教職への意欲」に関しては、7%で、教員への志望動機の再確認・大学での授業以外の学びの必要性などである。その他「印刷を効果的にする技術」が7%、「学校の防犯・安全確保の必要性」が7%であった。

**VII 学校支援ボランティア活動経験から、大学でもっと学ぶべきと感じたこと**

自由記述で具体的に5つを記述させた。全部で114件の内容を4つのカテゴリーに分けた。

4カテゴリーに分類し、代表的な記述内容を示したものが表4である。

「教育の技術と方法」が全体の46%で、字の丁寧さ・各教科の具体的な指導法・筆順・発問の工夫・机間指導の在り方・授業の構成や学習指導案・指導要領に関する知識・板書の技術・教職入門(講義)・学習評価・教育の制度と経営・文章の書き方・教師としての専門知識・教科教育法等である。「教育心理的知識と生徒指導」は37%で、児童の発達段階・児童生徒とのコミュニケーションの取り方・児童への叱り方やほめ方・特別支援教育の知識・生徒指導や教育相談の技術・児童生徒との話し方や言葉遣い・児童生徒の反応の具体例等である。「学校生活全般」としては10%で、レクリエーションや休憩時間の指導技術・教員とのコミュニケーションの取り方・学校の一日の流れ・校内施設の利用法や指導法・学校生活に必要な知識・授業以外の教師の実務などである。また「学校支援

表4 学校支援ボランティアから、大学でもっと学ぶべきだと感じたこと(自由記述)

記述内容	回答数	(小計)	(%)
教育の技術と方法			
各教科の具体的な指導法・基礎的知識	20		
筆順	11		
授業の構成・授業案等	7		
指導要領に関する知識	5		
板書の技術	5		
教職入門(講義)	2		
評価に対する考え方	1		
教育の制度と経営	1		
文章の書き方	1	53	46%
教育心理的知識・生徒指導等			
児童生徒とのコミュニケーションの取り方	9		
特別支援教育の知識	9		
生徒指導・教育相談の技術	8		
教育心理学、発達心理学の知識	8		
児童との話し方、言葉遣い	7		
子どもの反応の具体例	1	42	37%
学校生活全般			
レクリエーション、休憩時間の指導・技術	6		
教員とのコミュニケーションの仕方	2		
学校の一日の流れ	1		
校内施設の利用法・指導法	1		
学校生活に必要な知識	1	11	10%
ボランティア生自身			
観察者としての視点	4		
自信	1		
責任感	1		
自分自身についての内省	1		
一般教養	1	8	7%
合 計	114	114	100%

ボランティア活動の経験学生の成長」については7%であり、教科内容・授業観察者としての視点・自信・責任感・自分自身の内省・一般教養・社会人としてのマナー・一芸などであった。

#### VIII 学校支援ボランティア活動経験が大学の正規授業受講態度に及ぼす影響

調査対象者が、学校支援ボランティア活動後、大学授業の受け方がどのように変化したかを①授業内容の具体的イメージが持てるようになった ②授業に興味を持てるようになった ③課題意識をもって臨むようになった ④授業内容を理解するようになったの4尺度で示し、それぞれ4件法(4とでもできるようになった 3それなりにできるようになった 2あまりできなかった 1全くできなかった)の4段階尺度で回答させた。4尺度については、広島市「大学生による学校支援活動」体験エッセイ集(2009, 2010)に基づき、大学教員2名が選択した。

##### ①授業内容の具体的イメージ

とても具体的イメージが持てるようになったと回答した者が15名(26%)、それなりに具体的イメージが持てるようになったと回答した者が39名(68%)と9割強の学生が、学校支援ボランティア活動経験により大学での正規授業に具体的イメージが持てたと評価していた。

##### ②大学授業への関心

とても関心が強くなったと回答した者が19名(33%)、それなりに関心が強くなったと回答した者が33名(58%)と9割強の学生が、学校支援ボランティア活動経験により大学での正規授業に興味を持てるようになったと回答していた。

##### ③課題意識をもった授業参加

とても授業に課題意識をもって臨めるようになったと回答した者が16名(28%)、それなりに問題意識をもって望めるようになったと回答した者が32名(56%)と8割強の学生が、学校支援ボランティア活動経験により大学での授業に課題意識をもって臨めるようになったと回答していた。

##### ④授業内容の理解

とても授業内容が理解できるようになったと回答した者が19名(33%)、それなりに授業内容が理解できるようになったと回答した者が28名(49%)と8割強の学生が、学校支援ボランティア活動経験により大学での授業内容の理解が促進したと評価していた。

#### IX 学校支援ボランティア活動の経験が教育実習に役立ったことは何か

95%の学生が、教育実習に役立ったと回答している。(5%の学生は異校種でボランティアを行った。)自由記述で「役立ったこと」を記述させた。全部で28件の内容を4つのカテゴリーに分けた。「児童生徒とのかかわり」が役立ったとの回答が30%で、児童生徒にどのように接するか・どのように声かけをするか・どのように対応するか等である。

「学校教育活動全般」が役立ったとの回答は30%で、学校の1日の流れを学んだ・学校の実態が見えた・具体的に教育活動がわかった等である。「教育技術」については21%で、授業の仕方を学んだ・たくさん授業があることが分かった・臨機応変に対応することを学んだ・先生の精神面を学んだ等である。「教育実習への心構え」は14%で、学校の雰囲気があった・教育実習に臨む心構えができた・先生としての意識ができた等である。「先生とのかかわり」は6%で、先生とのコミュニケーションの取り方を学んだ・教員採用の勉強の仕方を学んだ・教師の児童生徒への接し方を見て学んだ・先生方への言葉遣い等である。

またどの学生も、学校支援ボランティア活動によって、教育実習への緊張がなくなったこと・スムーズに教育実習に入れること・教育実習前に教育現場を実際に知ること・職員室の様子がわかった・学校支援ボランティア活動で感じた自分の課題点を直し、この経験を生かして教育実習に望むことができる等、この体験が大学で受けるどんな講義よりも教育実習に生かされると感じたようだ。

## 考 察

本研究は、大学生による「学校支援ボランティア活動」に参加した学生が、その活動から得た様々な体験から何を学んだか、その教育効果を検討した。主な教育・学習効果は①教職志望動機への影響 ②正規の大学授業受講態度に対する影響 ③教育実習への課題意識についての認識変化 ④教員の資質・能力に対する認識の変化に収束されたので、この4点から考察を行った。

調査対象の学生は、H市の事業「大学生による学校支援活動」に参加したもので、30%がすでに教育実習を終えたもの、70%がこれから行うものであった。

教育効果を検討するにあたり、経験した学校支援ボランティア活動内容によって、受ける教育効果に差異がある(姫野, 2006; まなびんぐ紀要, 2009)ことから、幅広い活動項目から複数選択を行わせた。本研究の結果、調査参加者の95%が授業時の個別支援・配慮児童生徒への個別支援などの「個別支援」を体験していることや93%の学生が休み時間の遊び支援を行っていること、また、86%の学生がプリント学習指導補助を行っていることなど、ほとんどの学生が児童生徒と1対1で直接かかわりを持っていることが明らかとなった。また、TTで授業を行った学生が67%、掃除指導補助の学生は46%であったことから、児童生徒との直接的なかかわりを多く体験し、指導補助として児童生徒への声かけや対応の仕方に心を砕いていたことが推測できる。同時に、ほとんどの活動の場が授業時間の場と休憩時間の場であったことがわかった。従って、本研究の調査対象者は姫野(2006)が指摘するように、多くの教員養成系大学・学部が教員志望学生の児童生徒との直接的ふれあいを目的として導入した学校支援ボランティア活動の初期の目的を達成したといえよう。

次にこうした学校支援活動の経験がいかなる影響を及ぼしたか考察する。

まず、学校支援ボランティア活動経験の教職志望動機への影響について考察する。教育実習については、早期教育実習の体験が学生の教職への志望意識を強めたり、自分の適性を判断したりする場として機能しているとの研究報告もある(中山, 2009)。学校支援ボランティア活動に参加する学生は教職への意識が高い者が多く、教職に対する期待も大きい傾向にある。しかし、本来、教職への意識が高い本研究の調査対象者が学校支援ボランティア活動を経験することで教職への志望意識が「強くなった」と評価する学生が8割を超えていることは、学校支援ボランティア活動の経験は教育実習(中山, 2009)教育と同様に教職志望への動機付けを高める機能を有しているといえよう。その理由として、2つ考えられる。1つは、教師の仕事が魅力的と見えたり、授業や学級経営の素晴らしさに触れたりした結果、教師の使命感ややりがいを感じ、目的意識が芽生えたためであろう。これは本研究のポジティブ結果により裏付けられる。もう1つの理由は、子どもとのかかわりによって、児童生徒の実態が見え、児童生徒理解ができたことへの喜びを感じたためであろう。この点についても、これは本研究のポジティブ結果により裏付けられる。

次に学校支援ボランティア活動の経験が正規の大学授業受講態度に及ぼした影響について考察する。本研究の結果、学校支援ボランティア活動を経験したことで46%の本研究の参加学生が、さらに学びたい授業として、「教育の技術や方法」というカテゴリーを選んでいった。具体的には、各教科の具体的な指導法・授業の構成や学習指導案・学習評価・教師としての専門知識などであった。このことは、学校支援ボランティア活動の経験で教育現場の授業を見聞きするうちに、大学での「教科教育法」で学ばべきさまざまな指導法を「早く知りたい、もっとたくさん知りたい」と感じるようになったことがわかる。また、37%の学生がさらに学びたい授業として、「教育心理・生徒指導」を選択していた。これは児童心理を学び、児童生徒とのコミュニケーションの取り方を早く学びたいと感じていたためであろう。姫野(2006)は教師の授業補助をした学生はボランティア活動を通して子どもについての記述が少なく教師についての記述が多いのに対し、授業非補助の学生は子ども理解について

の記述が多いことを示し、学生の活動経験の差異により、学校支援ボランティアの学習効果に差異があることを示している。姫野(2006)の研究は学校ボランティア活動が大学教育に及ぼした影響を検討したものではないため、直接比較はできないが、本研究の調査対象者が経験した活動が児童生徒との個別支援を中心に行われていることや、「かわり」から生ずる喜びや困り感の検討結果からも「教育の技術や方法」「教育心理的知識と生徒指導」が切迫した課題になったのであろう。

本研究の結果、学校支援ボランティア活動経験により90%強の学生が「大学授業に具体的なイメージが持てるようになった」、また、90%強の学生が「大学授業への関心度が強まった」、「課題意識を持って授業に臨めるようになった」80%強の学生が「大学授業内容の理解度が促進された」と正規の大学教育への態度を正の方向に変容させていた。本研究の結果は姫野(2006)が指摘したように、多くの教員養成系大学・学部が学校支援ボランティア活動の導入目的として教職志望の学生が教育実習に加え、教師、児童生徒と直接ふれ合い実践経験を積む機会を増やし、これが教職志望学生の実践的指導力の育成・強化に連なるとの認識にあるとの指摘を裏付けしたものであろう。即ち、座学で行うことの多い大学の講義が、実際の教育現場で行われている日々の教育活動の体験を通してリアルに理解することができ、「教育理論」と「教育実践」を結びつけた結果であるといえる。大学の授業と学校支援ボランティア活動での学びが学生自身の思考の中でリンクし、互いに実りある本物の学びとしてもたらされたためであろう。

次に学校支援ボランティア活動が「教育実習への課題意識」に及ぼす影響について考察する。調査対象者全体の3割の学生が教育実習終了者であった。95%の学生が教育実習に行く前に学校支援ボランティアを行うことで教育実習での「教育活動全般」や「児童生徒との関わり」を経験しており安心して教育実習に臨めたと回答していた。学校の1日の流れや具体的な教育活動が分かったことで、実習前に教育現場を実際に知ることができたことや、児童生徒とどのように接するか・児童生徒への対応を知ること、実習への心構え・準備ができたと感じていた。また、学校支援ボランティア活動体験が大学で受けるどんな講義よりも教育実習に生かされると回答した者もいた。このことは、学校支援ボランティア活動と教育実習とは目的も活動内容もその効果もそれぞれに異なっているが、多くの学生が不安を抱く教育実習(西松, 2008)を前に、学校支援ボランティア活動を通して教育現場を早く体験し、そこから教育実習への自己の課題を発見し整理していくことができるため、教育実習へ及ぼす効果は大きいといえよう。また、本研究の結果は学校支援ボランティア、教育実習、教育実践等、実践的指導力を育成していくための教員養成課程プログラム構築に意義のあるものであろう。

最後に学校支援ボランティア経験が「教員の資質・能力に対する認識」に及ぼす影響について考察する。本研究の結果、学校支援ボランティアを体験後、「教師としての教育観」、「教育実践への理解」、「教師としての人柄」が教員の資質・能力にとって重要であるとの認識を深めていた。指導内容や教科指導法を理解する能力、教員や保護者地域とコミュニケーションする能力などの「実践的な教育活動への理解とその能力」を、「教育観」や「人柄」よりも、自分自身が身につけたと認識したことがわかった。また、「学校支援ボランティア活動中の困難認知」の検討から、学校支援ボランティアに参加した学生は活動中に「児童生徒への指導や対応の仕方」「児童生徒とのコミュニケーション」に対して困難感を認識していた。自由記述の検討結果では、学生は具体的に学校や教師、児童生徒とはじめてふれ合い、授業へ集中しない児童生徒がいることや学校が荒れていることなど学校現場の荒れの実態を目の当たりにして困難を感じていた。また、さまざまな学級へ入ることから児童生徒の顔と名前が一致しないことや学習ルールに学級差があることにも当惑と困難を感じていた。学校での困難を認知することにより、教師の持つべき必要な資質や能力として、学校支援ボランティア活動の経験学生が認識せざるを得なかったことは、「児童生徒とのコミュニケーション能力」「児童生徒への指導力や対応力」である。児童生徒への声かけ、児童生徒への言葉遣い、個別指導の在り方、児童生徒への指導

や対応が学生にとって最優先課題であり、日常的にその能力の有無を自身に問いかけたに違いない。

一方、「ポジティブ経験認知」の検討結果、子どもとのふれ合いの中で、子どもからの信頼、先生と呼ばれた喜びや心を開いてくれた喜び、頼ってくれる喜び、解けなかった問題が指導でできたことや勉強が分かったと言ってくれたとき、励ましに応じてくれたときなどに教師としての喜びを感じていた。このことから、教師の持つべき資質や能力として、「児童生徒とのコミュニケーション力」「児童生徒理解」「児童生徒への学習指導力」「児童生徒への愛情」「熱心な指導」などの重要性を認識していた。

その中でも、特に、学校支援ボランティア活動を通して学生にとって「教員の資質・能力に対する認識」がその体験から具体的に実感として認識できるといえる。

本研究は学校支援ボランティア活動が実践の指導力を有する教員の養成には欠くべからざる活動であることを明らかにした。また、学校支援ボランティア活動は参加した学生の教職への意識を促進するのみならず、教員養成系大学・学部教育にも多大な影響を与えていることを明らかにした。

今後は本研究の結果に基づき、学校支援ボランティア活動を組み込んだ、実践的指導力を有する教員養成プログラムの構築とその評価検証が求められる。

本研究はその第1歩を踏み出したに過ぎない。学校支援ボランティア活動の参加学生の時間、活動記録を詳細に検討する必要がある。

## 引用文献

- 姫野完治(2006). 学校ボランティアによる学習効果と可能性. 平成17年度国立大学教育実践研究関連センターの協議会年報. SCS大学間遠隔共同講義「授業実践研究」「情報とメディア研究」の概要.  
<http://www.crdc.gifu-u.ac.jp/cerd/scs/resume%20k5/scs20050708himeno.pdf>
- 松浦善満(2003). 教員養成学部学生によるスクールボランティア活動の持つ意義と役割—教育実践教室における事例研究から—. 和歌山大学教育学部紀要(教育科学), 53, 177-186.
- 文部科学省生涯学習政策局(2008). 文部科学省における学校支援ボランティア活動の推進について  
[http://www.jasso.go.jp/syugaku\\_shien/documents/20tudoj\\_mext.pdf](http://www.jasso.go.jp/syugaku_shien/documents/20tudoj_mext.pdf)
- 森下覚, 藤田敦, 麻生良太[他]. 学校支援ボランティア経験による省察の指導スタイルの変容…「まなびんぐサポート」活動記録の分析を通して. 教育実践総合センター紀要(28), 107-118, 2010
- 森下覚, 麻生良太, 藤田敦[他]. 学校現場における学校支援ボランティアの意義についての教員と大学生の認識…大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業を通して. 教育実践総合センター紀要(28), 99-106, 2010
- 藤田敦, 麻生良太, 衛藤裕司[他]. 教員に求められる実践的指導力の重要性に対する大学生の認識…「まなびんぐサポート」活動体験との関係. 教育実践総合センター紀要(27), 61-71, 2009
- 宗澤忠雄. 教員養成系大学の学校支援活動とサービスマニエールに関する考察. 福祉教育・ボランティア学習研究年報8, 180-202, 2003-12-06
- 太田史香, 山本裕子, 野嶋栄一郎. 授業場面における学校支援ボランティアの役割に関する事例研究. 日本教育工学会論文誌31(Suppl.) 145-148, 2008-02-10
- 廣瀬隆人. 学校支援ボランティアの概念の検討, 宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告10/11, 25-34, 2003-03-31
- 廣瀬隆人. 学校支援ボランティア活動の経験の展開, 宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告13/14/15, 15-24, 2007-03
- 教育職員養成審議会(1997). 「新たな時代に向けた教員養成の改善方法について(第1次答申)」

(1997.7.28)

教育職員養成審議会(1999)。「養成と採用・研修との連携の円滑化について(第3次答申)」  
(1999.12.10)

中央教育審議会(2002)。「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策などについて(答申)」

中央教育審議会(2005)。「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」

中央教育審議会(2012)。「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」

石原陽子。「教師の「実践的指導力」育成に関する考察－新任教師の属性に着目して－」、『プール学院大学研究紀要』第51号、203-216、2011

大分大学教育福祉科学部まなびんぐサポート運営委員会。「まなびんぐサポート」プログラムの構築－支援体制・評価システムの確立－、平成21年度特別教育研究経費事業成果報告書、2009

広島市教育委員会。「大学生による学校支援活動体験エッセー集」、2008

広島市教育委員会。「大学生による学校支援活動体験エッセー集」、2009

広島市教育委員会。「平成23年度「大学生による学校支援活動への参加募集」および「大学生による学校支援活動」希望内容」

江上園子・佐々木奏恵(2009)。「幼児教育課程の学生と保育現場との互恵的な関係を探る“ちょっと気になる子ども”の観察を通して－北海道教育大学紀要(教育科学編)」、60、1、165-177

相良麻里(2009)。「教育実習に関する効果的な事前・事後教育の検討－実践的指導力の基礎(1)－」、『東京家政大学博物館紀要』49、21-26。

相良麻里(2010)。「教育実習に関する効果的な事前・事後教育の検討－実践的指導力の基礎(2)－」、『東京家政大学博物館紀要』15、1-10。

三島知剛(2008)。「教育実習生の実習前後の授業観察力の変容－授業・教師・子どもイメージの関連による検討－」、『教育心理学研究』2008、56、341-352

中山博夫(2009)。「小学校観察実習の教育的効果に関する研究－小学校観察実習後の学生の意識の変容の事例に着目して－」

西松秀樹(2008)。「教師効力感、教育実習不安、教師志望度に及ぼす教育実習の効果」、『キャリア教育研究』25、89-96

黒崎東洋朗(2002)。「教育実習の評価」に関する研究－実践的指導力の基礎の育成とその評価－、『岡山大学教育学部研究集録』121、143、150

黒崎東洋朗(2006)。「実践的指導力の基礎を育成する日常的な教育実習の展望」、『岡山大学教育学部研究集録』131、131-139

<キーワード>

学校支援ボランティア、教育実習、実践的指導力、児童生徒理解、教師の資質能力

溝部ちづ子 (言語文化学科日本語文化コース)

石井 眞治 (子ども発達教育学科)

古谷嘉一郎 (社会臨床心理学科)

斉藤 正信 (教職指導センター・学習サポートセンター)

財津 伸子 (教職指導センター・学習サポートセンター)

山崎 茜 (広島大学 大学院生)

(2012.11.16 受理)